いわて生協　商品シール貼りボランティア

◆仮設住宅で生まれた独自の商品を、共同購入で供給

11 月 18 日、いわて生協の共同購入セットセンターで、被災地に住む人たちが作る商品にシールを貼るボランティア活動が行なわれました。

3 月 11 日の震災からすでに 9 カ月。そして、仮設住宅での生活が始まってから数カ月がたとうとしていますが、被災地の東北沿岸部は、今も街の復興はなかなか進みません。

被災地にはもともと平地が少ないことから、市街地から遠く離れた山奥に建てられた仮設住宅は多く、今も仕事を見つけられず、家にこもって気持ちが沈みがちの人、以前とは大きくかわってしまった生活に大きなストレスを感じている人は少なくないといいます。

そんな人たちの中から生まれてきた活動が、商品作りです。

沿岸部で手に入りやすいあわびの貝殻を加工してアクセサリーを作ったり（宮古市）、使わなかった支援物資の衣服をほどいて人形などに作り替えたり（大船渡）と、それぞれの地域でグループを作り、独自の商品を生み出してきました。

いわて生協では取り引きのあるミシン販売会社から古いミシンを譲ってもらい、それを創作グループに寄贈して活動を支援してきました。また、できた商品については、地産地消フェスタをはじめ、各地で行なわれる被災地支援のイベントで販売してきました。

「これまでも県内では計 16 回ほどのイベントで取り扱ってきました。しかし、一度に扱えるのはひとつのアイテムについて、せいぜい 10 個か 20 個程度。でも、共同購入のルートに乗せれば、もっと多くの人に知ってもらえて、多額の利用にも結びつきます」。

こう語るのは、いわて生協の組織本部、組合員活動支援チームの小野寺真（おのでら・しん）さんです。

いわて生協では、11 月の第 3 週、各地で作られたこれらの商品を集め、共同購入で扱うことにしました。集まった商品は全部で 18 アイテム。特別チラシを作って注文をとったところ、計 1,397 個、82 万 2,410 円の供給を上げることができたといいます。

供給した金額はすべて作った方（グループ）へ渡したい。余分なコストを削減するために、商品の袋詰めは作った方々にしてもらい、各地域からの商品は、最寄の支部か店舗に持ち込んでいただき、物流センターに戻ってくる帰りのトラックを利用して運び、納品のための送料負担をなくしました。

注文のあった 1, 397 個のアイテムすべてに
商品番号シールをつけるのがこの日の仕事だ。

残るは、シール貼りです。メーカーが作る商品ではないためバーコードはついておらず、それに代わる商品番号シールが必要です。それをこの日、ボランティアの人たちに貼ってもらおうという取り組みが行なわれたの

です。

この日集まったのは、いわて生協本部のある滝沢村をはじめ、盛岡市、矢巾町など近辺に住むボランティアの方々、全部で７人。このボランティアは、いわて生協が、組合員に限らず広く募って登録してもらうもので、活動があるたびに知らせて、参加してもらう仕組みです(CVC=コープ・ボランティアセンター)。

午前 10 時、いわて生協本部北棟１階の共同購入セットセンターの一角で作業は始まりました。小野寺さんが集めた商品に、ひたすら商品番号のシールを貼りつけていきます。

滝沢村から参加した大越（おおごし）いく子さんは、いわて生協では 2 回目の活動になります。

「本当は現地へ行って手伝いたいのですが、なかなかそうは行きません。ここで少しでもできることをと思って参加しました」と言います。

組合員の高橋江美子（えみこ）さんは、以前から手話のボランティアなどを行なっていたが、津波で同じボランティア仲間の友人を亡くし、以来、月に数度のペースでいわて生協が企画するボランティア活動に参加し続けています。

「まだまだ一緒に活動したかっただろうと思います。友達の無念さを思って続けています」

ボランティアに参加した組合員の米澤千枝子さん（左）と組合員の中野良子さん（右）。

矢巾町から参加した組合員の米澤千枝子（よねざわ・ちえこ）さんは、釜石の実家を津波でなくしました。幸い犠牲者は出なかったものの、「自分が育った家がなくなり、近所に住んでいた友人も亡くなりました。私にとって震災は人ごとではありません。できることはないかと思い、参加しました」と言います。

米澤さんに誘われたという組合員の中野良子（なかの・りょうこ）さんは、ボランティアには初めての参加でしたが、「意外と早く終わって、もっとやりたかった」と話していました。

「沿岸部へ行って被災者の方とお話する活動もありましたが、やはり直接、寄り添って話を聞くのは重い。軽いとはいいませんが、単純に体を動かしてやれる活動がいい」とこの日、参加したのは吉田克彦（よしだ・かつひこ）さんです。「最初に被害を知った時、10 年はやり続けなければと思いました。あまり根を詰めるのではなく、自分のやらなきゃいけないこともきちんとしつつ、月に１度のペースでもいいから（ボランティアを）続けていこうと思っています」と、長期的に向き合っていくといいます。

この日は予定の３時間を大幅に下回る１時間ほどで作業は終了しました。

「このような企画はこれからも 3～4 ヶ月に１度のペースで続けていこうと思います。一部の商品は店舗で扱っていますし、冬のギフト商品としてカタログで扱うことも計画中で

す」

　いわて生協の小野寺さんは、これからもより多くの人に、これら商品を知ってもらいたいと話していました。